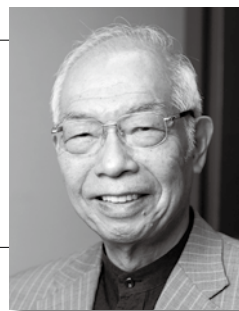


人はがんとどう向き合うか？

1981年以来、日本人の死因の第1位を占めるがん。最近は「治る病気」といわれるようになっていくが、依然として命にかかわるケースも多い。がんとはどんな病気で、どう向き合えばいいのか。長年、がんの基礎研究や臨床に携わり、自身も罹患経験のある垣添忠生氏が語った。

講師：垣添 忠生 氏

日本対がん協会
会長



がんは遺伝子の異常によって発生し、進展する細胞の病気

日本では、一生のうち2人に1人ががんになる時代だ。年間100万人を超える人がかかり、38万人超の人が亡くなる。一方、世界保健機関（WHO）の2018年の統計では、がんで亡くなる人は年間960万人。特に肺がん、乳がん、大腸がんが多く、7割が中・低所得国の人々である。がんは日本を含め全世界的な保健上の問題だ。

がんは遺伝子の異常によって発生し、進展する細胞の病気である。発生や進展には生活習慣、生活環境が関連しており、とりわけ、たばこ食事と感染症が重要な原因と考えられる。また、発生と進展は多段階で、長い時間を要することから、慢性の病気といえる。

現在、世界のがん対策は四つで構成される。まず、予防できるがんを予防する。禁煙、ワクチン接種などが重要だ。二つ目は検診によって早期発見すること。世界的には子宮頸がん、乳がん、大腸がんが検診の対象で、日本では胃がんと肺がんも対象になっている。三つ目に、治療はしっかり行う。新しい治療法や新薬も出ているが高額で、国民皆保険制度への負担などについて議論を残している。四つ目は、どうしても治せないがんには緩和ケアを提供すること。特に疼痛対策が重要であるが、貧しい国では薬を十分に提供できないこともある。

がんは医療問題であると同時に、経済問題であり、がん患者や家族が疎外

されるという社会問題でもある。

人間の強さ、弱さを全て包摂して医療は存在する

がんと向き合う人は多様である。ある患者は、わずかな聴力の低下に気付く、病院で脳腫瘍の一種と診断された。早期発見によりすぐに治療して社会復帰できた。一方、精巣にがんができた別の患者は、気付いてはいたが、気恥ずかしさや恐怖心が先立ち、なかなか受診できないうちに、悪化してしまった。以前だったら、余命4～5カ月というところである。幸いなことに最新の化学療法と大手術により、治療して今も元気になっておられる。

がんは100種類以上あり、かかる人も一人ひとり多様である。人間の強さ、弱さを全て包摂して医療は存在する。この無際限ともいべき組み合わせの多様性を頭に置いて、医療従事者は日々患者・家族と向き合う。

人生の伴侶を失う悲しみ 残された家族にも目を配ろう

私の妻は肺の下葉にわずか4ミリのがんが見つかり、放射線治療で一度は消えたが、6カ月後に肺門部にリンパ節転移が認められた。たちの悪い小細

胞肺がんで、その後、さまざまな治療をしたものの、病院で寝たきりになってしまった。私は妻の望みを入れて自宅へ連れ帰り、4日間の在宅医療の末に、彼女は両目で私を視認して手を握って亡くなった。言葉にはならなかったが、「ありがとう」と言ったに違いない。

妻が亡くなって丸15年が過ぎたが、私は悲しみを抱いたまま生きる術を身に付け始めた。私はがんの臨床家を40年、がんの基礎研究も15年行い、自身もがんを経験し、がん患者の家族であり、遺族でもある。国のがん対策にも25年間積極的に関与してきた。がんに関するあらゆることを経験してきた。今後も、検診の受診率を上げる、サバイバーや在宅医療を支援する、そして遺族のグリーフケアをするなどの対策に経験を活かして身を捧げたい。

40年来の人生の伴侶を失うことは、覚悟をはるかに凌駕する悲しみを伴う。患者はもちろん、残された家族にも目を配ろう。人間一人ひとりには弱くて儂い存在だが、また巨大な存在でもある。どんな状況に置かれても、人は希望があれば生きられ、大きな達成をする。